

HAPPY x NOIS

APYMAHER FD*
AIRAI NOSTALGIA*
ILLUSTRATIONS

PRESENTED BY COQ
FOR ADULT ONLY
2014 WINTER



-はじめに-

この度は『HAPPY×NOS』を手にとって頂き有難うございます。
この同人誌は、美少女ゲームブランド『パープルソフトウェア』から発売されております
『ハピメア』&『ハピメア-FragmentationDream-』と『未来ノスタルジア』にて
”私”こと『克』が原画を担当したキャラクターのイラスト集となっております。

この3作品は私自身としても非常に想い入れが強い作品であり、
ユーザー様からも非常に大きな支持を得られた作品でもあります。
とは申しまして、私自身の力による作品への貢献などは本当に微々たるものでしかなく、
製作スタッフや各関係者の皆様と、
なによりユーザー様のお力あつての”コンテンツ”であつたと、ひしひしと感じております。

そうした中、長らくご好評を頂いておりました『ハピメア』の
コンテンツとしての展開もほぼ終わりを迎えて、
何と言いますか”ユーザー様を取り残した”という気持ちが耐えませんでした。
勿論、余程のものでない限り、コンテンツというのはいつか必ず終わってしまうものです。
桜が散って、夢が終わるのと同じように、必ず終わります。

それならせめて、作品を支持してくださったユーザー様への恩返しとして、余韻が覚めやらぬうちに
私自身が何か出来ることは無いかと考え、製作に至ったのがこのイラスト集です。

ささやかながら、ユーザーの皆様にも僅かながらでも楽しんで頂ければ幸いです。

HAPPY×NOS



-もうひとつはじめに-

…はい、堅苦しいですね。小恥ずかしいですね。

まあ、作品のユーザー様に少しでも楽しんで頂ければというのは勿論のこと、作品を知らない方にも、なんとなくでも楽しんで頂けたなら幸いです。

コミケへ向けるものとしては私自身の初の同人誌となりますので、出来のほうはある程度お察しという感じではございますが、どのキャラクターも愛情を120%込めて描きました。

惜しむらくは、ハピメアと未来ノスタルジアの全ヒロインを網羅できなかったことです。

メインヒロインだけでもキャラ数がキャラ数ですし、私の担当外のヒロインを描いてそのヒロインが好きなユーザー様に楽しんで頂けるかというのも怪しかったので、そのあたりは初めから割り切ったの製作となりました。

構成というか製作上、わりと思いつきで描いたイラストばかりですので、テキストのほうは全て後付けとなっております。

それゆえ、やたらと文字サイズが小さかったりしますが、何卒ご理解くださいませ。

なお、本文中のテキスト(弥生以外のハピメアキャラ)を執筆して頂きましたのはハピメアのメインライターである 森崎亮人氏。

タイトルロゴを作って頂きましたのは、パープルソフトウェアデザイナー兼ディレクターの凛華氏
この本の製作を快く許諾してくださった、パープルソフトウェア代表の石川泰氏

お三方にはこの場をお借りして感謝を申し上げます。有難うございました!

HAPPY×NOS

Kudon Anna
工藤 杏奈
『流星と桜の少女』

体育の授業のあと「校舎裏の桜の木で待っている」と杏奈は言った。手早く制服に着替えた俺は杏奈と待ち合わせた校舎裏へ向かった。「…しかし校舎裏って。俺、腹減ったんだけど…」今はもう休みだ。体を動かしたこともあって余計にというか、足早に歩いている今も腹の音があさまらない。こんな時こそ「瞬間移動」が出来ればなあ……」そんなことを考えていたところで、ふわっと、桜の木の匂いがした。「あ、そうか。校舎裏のはまだ咲いてるんだっけ。』『やエザクラ遅咲きの特徴とすその桜が校内には咲いている。なんでもずっと昔にこの学園の創設者が『桜星』という学園名にちなんで、校内に色んな品種の桜を植えたそうさ。校舎裏の角まで来たところで、風に舞う桜の花びが見えて、それと一緒に杏奈の気配を感じ取る。——じわっ胸の奥が熱くなってくるのを感じる。…初めて会ったのも桜並木だったもんな——桜舞う木の下で、彼女は立っていた。そのせいだろうか、俺の中にある杏奈の印象というのが“桜”なのだ。「…花見しながら杏奈の“愛妻弁当”でも食べれば最高なんだけどなあ…」俺と同じ“超能力者”である杏奈は、俺と伊織に待ち受けていた美しい運命を変えるため“時間移動”という危険をおがしてまで、俺の“未来”を作りだしてきた。ながら、願いを叶える“流星”のように、時を超えて。そんな彼女の強い意志と想いを知った俺は、同じ時間を過ごしたいと思った。それからの俺と杏奈はあっという間に恋に落ちて——つい先日結婚した。時間移動が永続的な能力ではない。いつかは杏奈と別れなければいけないのだ。——それでも。例えその時間が、この桜の花が散ると同時に終わったとしても…俺はきっと、一生かけて杏奈を想うのだから。校舎裏の角を曲がる。そこには愛しい彼女の姿が——。あ、陽一!遅〜い!!!」姿……が——。「んもう!こ〜んな人気の無い校舎裏で体操服姿の新妻をほったかしてておくなんて!いつなら陽一はそんなプレイボーイになったの?!」「……………」そこには愛しい彼女の姿……もとい、絶世の美女の姿があった。「…そうだった…」杏奈と会って間もない時の印象は星でも“桜”でもなかった……。“ジェットコースターのような女”だって思ったんだ……。





Kasuga Iori
春日伊織
『伊織の純情』

はあ…「陽一君を置いて先にプールから上がった私は、シャワーを浴びてひとため息をつく。「もう、陽一君はエッチすぎます…!まあ、元はと言えば挑発したのは私ですけど…」——夏休み、陽一君とは、学園のプールを借りてデートをしていた。もちろん誰でも貸りられるわけではなく、単に生徒会役員である私と陽一君がその特権を使って…というか、プールの鍵を勝手に持ち出しただけなのだけれど…「プールに入る前から眼が血走ってましたからね…」それで少しばかりいたずらが働いてしまい「競争に勝ったらエッチしてもいい」という条件で勝負をしてしまった。とはいえ、基本的に運動が苦手な陽一君に、私が負けるということはまずあり得ない。手加減?もってのほかだ。つまり、最初から負ける要素などない出来勝負だった——はずのだが…「まさか”瞬間移動”を使うなんて…いえ、発動するなんて思いませんよ…」——比喩ではない。その言葉通り”瞬間移動”という超常現象を行使できる陽一君は”超能力者”だ。しかし陽一君の瞬間移動は、なにがしらの危機的状況であるとか、それほど強い意志がないと発動しないはずなのだ。「……はあ。つまり、それだけ私とエッチがしたかったということなんだろうか…」最近の陽一君は少しエッチすぎて、デートする度に鼻の下が伸びっぱなしだ。そして今日もそんな調子だったから、つい陽一君にとって悪条件の賭けをしてしまった。それでいつもの調子でエッチな事はかりするから、ついムカッときて、陽一君を置いて先にプールから上ってしまったのだ。「私は…陽一君にエッチな事にがつきすぎてほしくないんです。もっと陽一君との時間を大切にしたいというか……」陽一君と付き合い始めてからエッチなことは何度もしているけれど、正直言って私はセックスというのがまだ少し苦手なのだ。嫌いなわけじゃない。陽一君がエッチなのは今更だし、私だって陽一君に喜んで貰えるなら、たとえ苦手でもしてあげたいと思う。…ただ、…エッチの前くらい…キスしてくれてもいいじゃないですか…」そう、ただそれが不満だったのだ。我ながら馬鹿みたいな純情ぶりと短気さに呆れてしまう。しかし”呆れてしまう程度”には、シャワーを浴びて冷静になっていることに気付く。…今思うと、陽一君の気持ちを弄ぶような事をした私自身のほうが余程許せない。「……はあ、戻りましょうか…」何から話そう。どう言って謝ろう。でも、それよりもまずは——陽一君とキスがしたい。そんなことを考えてしまった私は、シャワーで冷ました身体がまだ照ってくるのだった。



Kasuga Iori

春日伊織

『陽一君はエッチすぎます!』



Alice
有栖

『ちゅーかなありすさん』

——いつだったか。有栖と俺が夢の世界に落とされ2人でフワフワしていた時の事だった。

「あ、あー？ この辺は中華風ですか？」「中華風というか、中華料理店風というか」

俺達の他に誰かの姿は無く、少しはゆっくり休めそうな場所だった。

「少し、休んでいくか。」「そだね。やー、なかなか休めなくて大変だったね」

そもそも、あの部屋から2人して急に別の場所に落とされ、ここまであれやこれや色々あってやっと形だけでも落ち着いてる場所にたどり着いたのだ。腰の一つも下ろしなくなる。その俺を見て、自分を見て、ふむ。と有栖が首く。

「どうしたか？」「や。透はともかく、ほら、この服って完全に浮いてると思わない？」「まあ、確かに」

不思議の国のアリス——にしてはちょっとスカート丈とか胸元がアレだけど。確かに中華要素は無い。

「と言う訳で、折角なので——」

パチン、と有栖が俺の真似をして指を鳴らすと一瞬の後にチャイナドレス姿になっていた。

「んふんふん、どうどう、可愛くない？ いやー、有栖ちゃんは何着ても似合うな、惚れ直しちゃうなーとかならない？」「惚れなあすも何も惚れてるままだけど？」「……むぐぐ、女として喜んでいいのが、反応の薄さに文句を言うべきか」

そうは言うけど、新鮮だと思うし可愛いと思う事と惚れ直す事は別じゃなからうか。

「ほら、こう。もっと似合うね、とか。流石有栖、スリットが最高にセクシーだねとか。脚長い、ビューティフル！ とか無い？」「似合うし、エロいとは思うけど、脚なあ……」「今思った事を素直に言い給え、キミ」

「そういうセクシーさと言うなら部長の方が……」素直に思った事を言ったら首を絞められた。

「す、素直に言えと言うから！」「そりゃ弥生の方がエッチいけど！ でもほら、弥生には出来ない事があります！」「そりゃ色々あるだろうけど、何？」あの外面に特化したダメ人間は出来ない事だらけだと知っているけど。と思うや否や、有栖は足をぐっと上げて抱える。

「ふふふ、中華と言えばカンフアクション！ 有栖ちゃんも流石、そのあたりも完璧なのです！」今の自分の姿勢に疑問は無いのか、いや、気付いてるのかどうか。と、そこでふとイタズラ心がわき上がる、というかこんな有栖を見せられて我慢出来なくなったというか。

俺が一つ指を鳴らすと——

「えっ？」胸元の留め具が外れて、その胸がぶるん、と飛び出すのだった。



「え、あ、ちょっと……透っ?」「そんな、格好見せられて、我慢できるかつ……!」
有栖は彼女だ。愛してる、そんな事は今更言うまでもない。その彼女が足を広げ、胸……は、俺のせいだけだ。こうして俺の前に居る。そして周りには誰もいない、居る訳が無い。そのまま近づくとそっと有栖の体を支え、俺は自分のモノを取り出した。
「や、あ……ちょっと——ん、んうっ……!?!」
夢の中特有、というか。有栖の下着は俺のモノを押つけた所から溶けていく。
「その髪型も可愛いな——」「いい、今そんな事、いつ……ひう、あ……あ、ちょ……まって、入って……!」
既に俺のモノの先端は有栖の割れ目を押し広げ中に潜り込もうとしていた。
「ここに来るまでだって、大変だったんだぞ……!」「た、大変だったけど……!」
大変の意味が違う。飛んだり跳ねたり、大変だったけど、その間ずっと有栖が一緒だった。体を押しつけられたり、スカートがまくれたり、胸が跳ね回ったり、時々こぼれかけたり。重ねて言うと、彼女と2人ぎりそんな状況で落ち着かなかった。そしてあちついたと思った所でコシだ。うん、我慢出来なくても仕方ないと自己正当化する。
「あ、あっ……あ、ああ……ん、や……あ、ああ……♪」
そのままゆっくり俺のモノが飲み込まれていくと有栖が甘い吐息をこぼす。
「ちょっと、ま……は、あ……これ、や、はいり、かたが……ちがっ♪」
俺が足を抱えてるせいで動くにうごけず、有栖もそのままの姿勢で体を揺すられる。微妙に不安定な姿勢なのもあって、突き込みが不規則になる。
——にじゅ、じゅっ、ちゅ、くちゅっ。
「あ、あっ……あ、はあっ♪ あ、あっ……や、あ……透、これえ……♪」「立ったまま、入れられるの……好きだもん」「ちがっ……そういう、時っていつも、透が、……乱暴に、するから……」「乱暴にされるの、好き?」「じゃな、くて……はげし、から……ん、んくっ……感じ、ちゃって♪」それはつまり強めの方が好きなのか、なんて今更思いながら俺は腰の速度を速めていく。
——にちゅ、じゅちゅ、ちゅくにちゅっ!
「あ、はあ、は……あ、ああっ!」
不安定な姿勢で突き込む度に有栖の胸がびるびると震える。
「や、あ……ぎちゃ、あ……いっちゃ、あ、ああ、あっ……!」
そして激しく、有栖の膣中を前後し、そのまま俺は——。
「や、あ……透、ぎちゃ、あ、あっ……あ、ああ、ああああっ!!」
そのまま有栖の絶頂を迎える膣中に、溜まった熱い精液を遠慮なく、吐き出すのだった…。



Kasuga Haru

春日ハル

『ナースのお姉さんでエロ妄想』



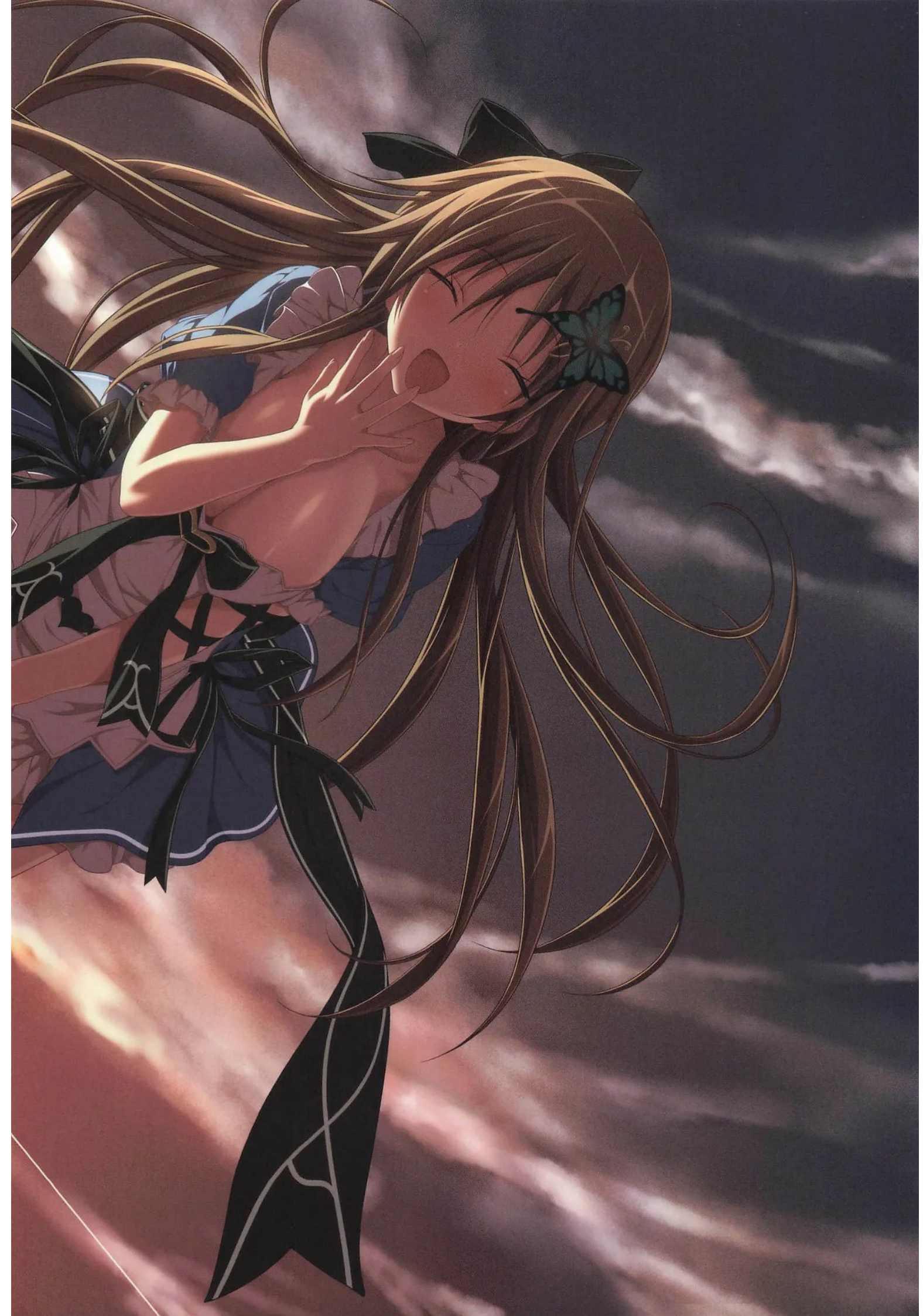


Yayoi Barward Lutwidge
弥生・B・ルートウィグ
『うさぎにはにんじん』



DISAPPEARANCE OF ALICE





Maia
舞 亜

『Beloved Nightmare』

——雪の降る夜道。運乃での事務仕事というバイトというか、家の手伝いというか。そういったお手伝いを終わらせて帰ってくると、部屋の灯りが付いていた。

その時点で大体想像はついたけど、鍵を開けて入ると、そこには当たり前のように舞亜が待っていた。

「お帰りなさい、お兄ちゃん。寒かったですか?」「……寒かったよ?」

外は寒いので扉を閉めて部屋に上がる。その間、舞亜はベッドの上から動かず俺の様子を眺めて居た。このスベアキーは預けてあるから、そりゃいつでも入れる。入れるんだけど——。

「何しに來たんだ?」「あら、理由が無ければわたしがお兄ちゃんに会いに来ちゃいけないの?」「そういう訳じゃないけどな。というか、今日は運乃でバイトだって言ってあったる」

すると舞亜はにこりと笑う。

「ええ、そうね。そのまま泊まって来るかもしれないからね」「……そうだよ」

実際、明日は休みだから泊まって行くか、と向こうのおじさんにも言われて居た。

「そうしてたらどうするつもりだったんだ」「どうもこうもないわ。わたしは1人ここで寂しく枕を涙で濡らしているしか無かったもの——」

そう言っ俺の枕をぎゅっと抱き締める。時々、そうやって『マーキング』するせいか、舞亜が帰った後、枕が何カ落ちて着かない匂いになっている事があった。

「何してるんだ」「こうしてわたしの匂いをつけてるの。お兄ちゃんが居ない時にはいつもこうしてるのよ。悪びれた様子も無く枕を離さず足の間に挟んで抱えてしまう。俺の視線に気付いてくずりと笑う。

「……というか、何で制服なんだ」「だって学校から直ぐにここに来たんだもの」「何時だと思ってるんだ」「——ええ、だから。とても寂しかったわ」

口調と表情が全然一致していない。ただ、その殺つぶしの為か。舞亜が俺の居ない間に読んだ本はもう棚一杯で、弥生先輩が面白がって貸したり置いてくものだから大変な事になっていた。

「来るなら来ると一言言ってくれよ」「あら、そうしたらつまらないじゃない」「どうしてだよ。待ってる間、暇だろ?」「——ふふ、そうやっていつお兄ちゃんが来るのか。待って居る間もとても素敵なのよ? それに来てくれた時は嬉しいし——」「嬉しいし、何だよ」「わたしに来て、お兄ちゃんも嬉しいでしょ?」

その言葉に何も言えずに居る俺を見て、舞亜はまた舞亜なりに楽しそうに笑うのだった

そうして、既に大きくなり始めていた俺の物をズボンの中から取り出して
しまう。

「舞亜……?」「なあに、お兄ちゃん♪」

楽しそうに笑いながら舞亜は俺のモノを指先で弄る。舞亜の割れ目にに
じる甘酸っぱい匂いが鼻に満たされて来て、一気にムクムクと大きくなる。
「ふふ、お兄ちゃんってば。体は女の子みたいに細いの、ここはこんなに
おっきいんだから」「……そんなに、細く無いぞ」「そうかしら。ふふ、ほんと
不思議……こんなのがわたしのナカにはいっちゃうんだもの。ねえ?」

濡れた舞亜の割れ目がひくつくようになって俺の顔に押しつけられる。
そしてそのまま、俺のモノを触って無い方の手でずり下着を下げた。

「ん、んうっ……」

するとそのまま、舞亜の割れ目から鼻にすこしツンとくる甘酸っぱい匂い
が溢れて来る。

「……舞亜。その」「なあに、お兄ちゃん」

俺のモノがこれだけ勃起して、弄られ続けている手前、止めてくれとはもう
言えなくなっていた。

「風呂、入ったのか……?」「ええ、当然。いつでもお兄ちゃんに可愛がっ
て貰えるように、きちんと準備してるんだもの」

別に今日に限った話じゃない。舞亜は、こういう俺と2人きりで、それこそ
セックスが出来るような時に、甘くわずかに焦げたような匂いが漂ってく
る。それは舞亜のシャンプーか何かの匂いなのか、と思っていた。

「ん、ふうっ……や、あ……弱い所、そんな……」

その匂いに促されるように、俺は舞亜の割れ目に舌を這わせ、舐め上げて行く。わ
ずかに身をよじらせながら俺のモノを擦り上げていく。

——く、しゅ、……ちゅ、くちゅ、にゅく……ちゅ、しゅ……。

舞亜が俺のモノを擦り上げ、責め立てて行く感触と、俺が舞亜の割れ目を舐め
上げる音が頭の中でくちゃぐちゃに混ざり合う。

「あ、はあ……あは、ん、そんな、舐められると……ん、は、あ……んん♪ もっと、可愛
がりたく、なっちゃう——」

舞亜の手に比べてグロテスクな俺のモノ。太く脈打つツルを愛おしそうに細く冷たい
指が擦り上げていく。

「は、あ……はあ……ん、ふふ……ビクビク、震えてきた。可愛い♪」

決して可愛く見えないッレを舞亜がさらに強く擦り上げてくる。

「ん、あ……は、あ……あ、あ……♪」

舞亜に擦られ、舐め方が強くなってしまう中、舞亜が愉しそうに嬉しそうに俺のモノを
舐っていく。何度も、数え切れない程。舞亜とこうして愛し合ってきたから、
弱い所も分かって居る。容赦なく動く指に快感が高められ、そして——。

——びゅる、びくびゅく、びゅる!

「ふふっ、はい、沢山でちゃって……しょうがないんだから」

舞亜はうっとりとして声を漏らし、そして——。

「ね、お兄ちゃん——」

そう言って身を屈めて俺のモノに口づけをすると、無言で俺の方を見るのだった——。



「……あの、舞亜さん?」何かしら、お兄ちゃん♪」

実に嬉しそうに俺の『顔の上から』舞亜が返事を返してくる。舞亜が呼ぶので、ベッドに転がってゆっくりしていたら、こんな事になっていた。

「俺は、枕を返してくれって言っただけなんだけど?」「ふふふ、そうね。だけどお兄ちゃんが悪いのよ。返さないとわたしの脚を枕にするなんて言って膝枕させるんだもの」「……いいよって言ったじゃないか」「ええ、だけどタダでは言っていないじゃない」

その結果がコレなのは割が合わないと思うのが正常のような気がする。しかも人を仰向けにさせてだから完全に尻に敷く気という意味が違う。

「あら、どうしたの? わたしの脚を頭に敷いたんだもの。わたしがお兄ちゃんの頭を脚で敷いてもいいでしょう?」「……この体勢に疑問は無いのか」上を向いた俺の顔を尻で敷いている。当然、舞亜の大事な所が俺の鼻から口元にあたってしまっている。

「ふふ、わたしがしたいって言ってるんだもの、どうして止めないといけないのかしら?」「お前な——」「だって、わたしお兄ちゃんに見られていない所も、触られていないばしょも無いのよ?」

ニマニマと楽しそうに俺を見下ろしてくる。

「脚も、胸も、唇も大事な所も——体のナカも、心までわたしはお兄ちゃんにさらわれて撫でられて可愛がられてるんだもの——」「それは、そうなんだけど——」「どうしたの? ふふ、いいのよお兄ちゃんがしたいようにして。だってわたしはお兄ちゃんのモノなんだもの」「お前はお前だろ、俺の物なんかじゃない」「ふうん? そんな事を言うのね。悲しいわ——」

そう言って舞亜はそのまま俺の股間に手を伸ばしてくる。

「舞亜……?」

Hatori uta

羽鳥詩

『お姫様はゲームで夜明け』



Hatori Uta

羽鳥詩

『セーフポイントまでイかせて!』





Sanada Kanata

真田かなた

『かなたのばんつと逢うために』

—とある休日。3年生の卒業を来月に控え、学生会会長だった隼さんが任期を終えてからというものの、同じく学生会役員である俺とかなたは、ただでさえ少なかった人員が減ったことで休日だろうがあかまなしに仕事に追われる毎日を送っていた。そして今日もまた、誰もいない学園に律儀に登校し、生徒会の溜まった仕事を片付けている最中…なのだが。「っ…痛ってえ…大丈夫か?かなた」「あいたた…あ、うん。大丈夫……」書類を運ぶ途中、階段を踏み外したかなたとそれに巻き込まれた俺は、転げ落ちた階段の踊り場で、ダメージ箇所をさすっていた。「はあ…っなく。なあ、かなた?お前が転ぶのは毎度のことだけど、せめて階段ではもうちょっと気をつけてくれよ」「うう、ごめ〜ん……」(…空中浮遊の練習をしておいて良かったな…)浮遊、とは言うが、俺のしょぼい超能力では本当に宙に浮けることはなく、せいぜい浮力で体重を軽くなる程度のもなのだが…まあ幸いそのおかげで落下の衝撃を和らげつつもかなたに超能力が/しることもなかったわけだ。「…って、ちょっとあたしがまたドジっただけに言ってるけど!陽君、私のスカートの中覗いてたでしょ!?」「…バてたか」そう。階段に登る時にわざとかなたの後ろについてスカートの中を覗いてたところ、それに気付いたかなたが驚いて階段を踏み外したのだ。「や、やっぱり?なんかイヤ〜な視線を感じるな〜と思ったら!」「ま、まあ落ち着いて…そうは言うけどな、かなた。休日にまで学生会の仕事をやられてる身としては、かなたのばんつが見れるくらいは約得があっても良いと思うんだよ」「良くないよ!!あたしのばんつは見世物じゃないよ!?」「…それにしては、ここんとか毎日見てる気がするぞ…?さすがにこれだけばんつを見せられると、わざと見せてるんじゃないかってくらいだ。それにほら、今だって。」—そう。今まさに、床に転がっている俺の目前にあるのはかなたの尻なのだ。「あ…あああ…うわあああん!見ないでえ〜っ!」



Toriumi Yuko

鳥海有子

『ドキドキクッキングゆうこさん』

——改めて、何故こんな状況になったのか。自分でも良く分からないままにこんな事になっていた。
ガシャーン、と偉い音がして台所の方を見ると、ボウルを落としたのが有子が座り込んでいた。
——裸にエプロンだけで。

「う、あ、えあ、ごめん……？」「……怪我は？」「あ、うん。それは大丈夫だよ、平気」「なら良かった——」
と表情が平穏ぶっていても、こっちは全然落ちついていられなかった。

事の始まりは俺が平坂の作ったカップケーキを美味いと言った事だった。あの準備室で「気分が向いた」と作って来たそれは手作りだからなのかとても美味しくて、皆でべろりと食べてしまった。

ただ、その何日後。有子が「ほ、ボクだってお菓子くらい作れるんだよ？」と言ってきた。別に疑う理由も無いから「そうだな？」なんて言ったらムキになって「憑いて無いだろう！ ほ、ボクの方が、その、キミを喜ばせられるんだからね！」と顔を真っ赤にして言う。——有子が興奮すると、そのまま倒れるかとも思った俺は何とかおちつけようとした結果、とりあえず近々作って貰う事になって、何故かこうなった。

「……なあ、有子。今更なんだけど、いくつか聞いていいか？」「う……なんだい？」「……何で、裸なんだ？」
何も言うな、出来上がりまで大人しく見て居ろ！ というので見たり、見てると色々マズイというか髭いそうになったんでそのままにしていたんだけど、もうここまで来て聞かざるを得なかった。

「そ、その……さみを、喜ばせようと、思って……？ もしかして、嫌いだった？」「いや、そりゃ……その、嫌いじゃないけど。でも、何で裸エプロンなんだ」「あ、男はそういうのが好きだって、弥生さんが……」
「あの金髪……！ 俺の脳内でダブルピースを決める先輩がよがる。「あ、あと……やっぱり平坂さんの作ったケーキ美味しかったから、そういう所で、その満足度をかせがないと、と思って……」

そう言って身をよじるから、有子のすくすく育ちすぎたおっぱいの間にエプロンが挟まれてしまう。そこでもう、俺は限界だった。

「……それとコレとは別だと思うけど、俺を満足させたい、と思ってくれるんだよね」「う、うん。そうだと、ひゃっ！」有子の指についたクリームを舐め取り、そのまま俺はその身体を抱え上げる。

「え、えっ？」「そんな格好で側にいられて我慢できるか……！」

そのままベッドに運ぼうとする俺に、有子はすこし戸惑った後抱きついてきて。

「……ボクで、満足させられるかなあ」なんて、はにかみながら言うのだった。



「……ふふふ、ほんと。透はあっぱい好きだよな？」

有子とこのう時間、何と言うか……不意に、というか特に何か言わずとも訪れる。どちらかがその気になった時、というより。ふとした時にお互いがお互いを欲しくなるタイミングが重なるような感じだった。今日もそんな感じで、夕食後に寄り添っていたらこうなった。

「有子だって、胸触られるの好きじゃないか」

胸元を舐め上げながらそう言うと、動いた様子も無く肯く。

「そうだよ、だって透がしてくれるんだもの、好きだよ——」

それはどっちの意味なのか分からないけれど、座ったままの俺のモノを器用に取り出してしまふ。既に勃起した俺のモノに指を絡ませながら、胸を押しつけてくる。

「んっ……すご、こんな堅くて熱いのに、ボクはまだ滅茶苦茶にされちゃうんだ」……今日は、ゆっくりですか？」

有子とのセックスは、激しく息を切らすまに求め合うか、ゆっくり……それこそ、一晚絡み合うように続けるか。両極端だった。ただ、今日は強めの方がいいのか——

「んっ……♪」 とうしようかなあ……どっちもボク好きなんだよね。強いのは求められてるって思えるし、優しいのはずっと透を側で感じられるから」有子は俺のモノの弱い所をゆっくりとねぶってくる。すっかり、弱い所を知られて居るから、抵抗も出来ない。

「……今日は、透の好きにして」

そう言う言葉に、いくら慣れてても胸が高まってしまう。「あは、びくんって震えた♪」 もう、ボクの事なんていつでも好きにしていいいのに……」「十分、してるつもりだけだな」「……ふふふ……そうかも♪」

そう言いながら、俺は堅くなってくる乳首を舌と歯で刺激していく。

「あ、んっ……ん、くうっ……♪ は、あ……あ、すご……ん、は、あ……ね、ねえ」「ん、なんだ……？」

こっちの動きに合わせて有子の手動きが早くなっていく。

「……このまま、手でしゃうのと、その……ボクのナカに入れるの、どっちがいい？」

濁けるような視線を向けてくる有子は、きっとどちらでもいいんだろうけど。

「——おいて」

その言葉に嬉しそうな表情を浮かべると、そっと俺の上に跨ってきた——。

弥生・B・ルートウィッジ

描いてしまったてごめんなさいPart.2

わりとキャラクターを汚すのを恐れてしまう私でも、
弥生さんや杏奈(大)でエロを描くことには全く躊躇が無いんですね。

舞亜

「舞亜はいつもあなたの夢のなかにはいます。」※Nights(内藤)違い。
愛妹舞亜(あいまいあいあ)というのをどこかで見ました、うまい事言う人も居たものです。
そして本当にしようがないお兄ちゃんの透さんは爆発してよろしい。

有栖

有栖にはやっぱり笑顔が一番!とかなり真面目に描いた一枚。
だけど同時に、自分の存在に悲しみを背負っている娘なので、影が落ちるんですね。
ちなみにこのページはホッキキスから綺麗に外すことでピンナップに出来ます。

有栖

有栖さんのノーガード戦法の究極形を描きたかったのですが、
さすがに荒唐無稽すぎたかなと反省しております。
それでもテクニストを書いてくださった森崎さんに感謝。

鳥海有子

病弱ボクっ娘は最高ですね。
森崎さんのテクニストもさることながら、
有栖と有子の二役を担当されている北見六花さんCVが本当に素晴らしい。

鳥海有子

描きながら
”透さんは爆発してくだらないだろうか”と
切に思った一枚です。

羽鳥詩

羽鳥詩(19)まっくら。現代編でも未来編でもなく、
詩ルートその後の後みないなシーン。半透明のペビードールが非常に大変な一枚でした(苦笑
H差分では思いつきで胸開きタイプにしてみました。

春日伊織

イラスト本製作初期に描いたイラストで、
まだこのタイミングでは背景を白抜き気味で描く予定だったんですね。
H差分では背景も変わるので非常に大変な一枚でした(苦笑

工藤杏奈

ツイッターにて制服カ体操服、どちらにするかを意見募った一枚。
イラスト・テクニスト共に杏奈らしい、刺激的で楽しいイラストになったと思います。
桜の花びらが非常に大変な一枚でした(苦笑

工藤杏奈

未来ノスタルジアのEDで登場(再会)する、杏奈。通称『中杏奈』
本文でのイラストが無いという表紙詐欺も良いところ。
というか未来編の『小杏奈』も描けてないんですね…(泣

真田かなた

ばんっキャラでありながら、本編では全くばんっを見られないという謎。
地味ながらもとても好感のもてるキャラクターで、私も大好きです。
それはもう、個別ルートが欲しかったくらいです。

春日伊織

描いてしまったてごめんなさいPart.2
線画まで描いたものを一度没てしまい、そのままハルさん梓自体を無くすつもりだったのを
”下半身を過去に描いたものから流用”という物腰ぐでっ上げの一枚です。

